

# 日本・ベルギー関係史の一断面： 第一次世界大戦期における資料

櫻井良樹

## はじめに

1914年8月4日にドイツ軍は永世中立を犯してベルギーに侵攻した。イギリスが対独宣戦を行ったのは、この時であった。ドイツ軍は、わずか2週間ほどでブリュッセルを陥落させ、ほぼ全土を占領し、新たに組織された国民生活を掌るための国民評議会にドイツ軍司令部が大きな影響を及ぼした。ベルギー国王アルベール一世は、フランス国境の寒村フェルヌにとどまり抵抗を続けたものの、政府はフランスに亡命した。日本も日英同盟の存在を理由として、対独宣戦布告を8月23日に行った。

ずいぶん前に出版した磯見辰典・黒沢文貴・櫻井良樹著『日本・ベルギー関係史』（白水社、1989年）において、第一次世界大戦に際して、日本と同じ連合国の立場に立ったベルギーへの義捐活動が、たとえば東京・大阪朝日新聞社のベルギー応援キャンペーンなどを通じて行われ、いっぽうではベルギー公使館による対独宣伝活動が日本国内で活発に行われたことを示したことがある。

本文は、その後に入手した資料により、上記の動きを補足しようとするものである。

## 1. 日仏白従軍死傷兵救護会

これは「日仏白従軍死傷ノ兵救護会関係雑纂」（外務省記録 5・2・8・36）というファイルに見える団体である、同記録によると戦争の行方がまったく予想の付かない1914年9月という段階で、神戸・大阪駐在のフランス領事シャルペンチャーとベルギー領事カストールが主唱したものであった。加藤高明外務大臣および妻の春路も賛助員となる事を表明している（9月16日フランス大使との会談において）。

その趣意書の一部は次のようなものであった（カタカナはひらがなに直し、適宜句読点を補った。以下同じ）。

今回欧州の大戦乱には、彼我共に未曾有の大兵を動かし激戦苦闘日に相継ぎ、従て其被る損害も亦た甚大に且つ悲惨なるものあり、又極東に於ても膠州の戦況漸く酣ならんとするに際し、日本在住の重なる仏人及白人は日本に於て戦員に対する諸種の慈善的美挙あるを知り、進んで之れに同情の意を致し以て膠州に於ける聯合軍の傷病兵に対すると共に、仏白の傷病兵に対し共同の慈善事業に最善の努力を吝まざるべきを言明せり

顧ふに仏白両国の如きは、交戦地として其激戦の結果実に惨憺たるものあり、又膠州湾頭に実現せんとする攻囲戦の実況の如きも、其凄壯の状今より之を想像するに余あり、時將に冬期に向はんとす、幾多傷病兵の苦悩は如何、想ふて此に至れば転た同情に堪へざるものあり、此時に際し此等不幸なる傷病兵の爲めに之を救護するの機関を創設するは最も機宜を得たるものなるを確信し、茲に普く江湖の同情に懇へ相当の寄附を得以て傷病者の救護に欠くべからざる温衣其他の必要品を寄贈せんとす吾人は同情ある天下の諸賢に切望す、希くは不幸なる傷病兵の惨状を察し、吾人の微衷を納れ、以て此挙に賛同を吝み給はざらんことを

これを見ると膠州湾における戦いが始まったことをきっかけとして、日本に在住するフランス人とベルギー人が、その戦闘で傷付くであろう連合軍の兵士に対する義捐とフランス・ベルギー兵の救護を行うという内容となって

いる。膠州湾における連合軍の戦いというのは、具体的には日英両軍しか出撃していないので、フランス・ベルギー兵に対するものはヨーロッパ戦線でのということになる。

この趣意書には、さらに次のような留保が付けられている。

- 一、本会発起の際、英露両国側にも予め共同の事を交渉せしむ、或は既に類似の事業の進捗せるあり、或は他に都合ありて辞退せられたり
- 一、仏白両国に在り又は膠州に在る英軍の傷病兵は、共に本会の贈与品を頒つこととせり

イギリスとロシアにも会への発起を求めたが、類似の企てがあるということで、フランスとベルギーのみで動くことになったというのである。これは日本の出兵数は少しだし、イギリスは独自に行うであろうし、ロシアは加わる可能性は少ないということで、日本の松井慶四郎外務次官が、主にフランス、ベルギー両国兵を対象にすることを薦めた結果であったようである。具体的にどれくらいのアクティビティを発揮したのかがわかって面白いのだが、残念ながらこれ以上の記録は見つからない。

## 2. ベルギー公使館による義捐・宣伝活動

『日本・ベルギー関係史』で挙げたベルギー公使館のドイツ批判キャンペーン以外の資料が新たに一つ見つかった。それは『白国に於ける独逸の施政に関する中立国人の所感及独軍が白国にて犯したる残虐に関するサキソニア王の兄弟マックス・ド・サックス親王の証言』という4頁ほどの文献である(国立国会図書館蔵、337函245号)。発行年月日は内容から1916年と推測される。

これはドイツに占領されたベルギーの状況について、ドイツ側新聞が伝える報道・宣伝の虚構を訴えるという目的によって記されている。

そこでは、まず中立国であるスウェーデンの公法学者シー・ニック・フォン・コッホの証言(これは1916年2月16日のターゲンス・ニヘテル紙に掲載されたもの)が引用される。

〔ベルギーの一部分においては整然たる秩序をなしているが……櫻井註〕白国全体より論ずれば、彼等〔ドイツ人のこと〕は決して成功者たらず、是が理由は種々あらんも、就中白国人が戦乱序幕当時侵略者〔ドイツ人のこと〕の振舞ひたる残虐なる手段に付き決して之を忘却せざる一事之なり、〔中略〕然れども他の一理由は、既に一般に知られ且又屢々しかく認められし如く、独逸人が他国民の感情、習慣及び伝習等を解し且つ之を尊重するの能力を欠くこと之にして、彼等は幼稚にも独逸に適すること世界到る処亦然りと信ずるものなり

この時すでにドイツの占領は1年半以上が経過しているわけであるが、占領施政がうまくいっていない理由を、ベルギー人がドイツ侵略当時のことを怨み続けていることと、ドイツの施策がドイツ流を持ち込んで、それまでのやり方を無視しているからだというのである。

これに続いて、この文献の著者は、ドイツの非難すべき点として、まず国際法上ベルギー人の一般民衆を給養する義務があるのに食料品不足のためそれが出来ておらず、そのためベルギー人が飢餓に瀕していること、それを救っているのが白国救済委員会であり、また中立国（主としてアメリカ）が食料を供給している現状に触れ、さらにハーグ条約に違反して、復讐的にベルギー労働者を使役しようとして失敗し、それに代わって労働者をドイツに拉致して使役していること、また軍事課税の徴税と様々な物品の徴発を不当に行っていることが記されている。

この文献の末尾は、カトリック教主エミル・プリニム卿の著述の中におけるマックス・サククス親王の書簡の引用である。この引用があるため卿は処罰されたというものである。マックス・サククス親王というのが、サクソニア王と兄弟関係にあるというところがミソである。その書簡の中に、「白国に於ける独人の所業は其の天罰恐るべきなり」との言葉があることを取りあげて、その地位上ベルギーの状況の「万事を視察し且つ之を知り尽くし得」るドイツ親王の「悲痛極まりなき告白」だとし、それを伝えたプリニム卿の「良心の絶叫」だと紹介して、いかにドイツ占領下のベルギーの状況が悲惨なも

のであるかを訴えようとしたものである。

さてこの文献で非難されていることは日本側には、どのように伝わっていたのであろうか。その一端を知ることができる資料があるので、それを紹介しておく。

「欧州戦争ノ際ニ於ケル各国ノ態度一件（白、伊、法王庁ノ部）」（外務省記録5・2・15・22-2）では、ベルギー人のドイツ人に対する態度が報告されている（「独逸人ニ対スル白耳義人ノ意向報告ノ件」1916年9月14日スイス三浦弥五郎公使より）。これは『和蘭及白耳義に関する独逸週報』の占領2年が経過したブリッセルの民心についての記事を紹介したものである。そこでは対独感情は現在最悪で、敵意には堪えがたいものがあり、なるべくドイツ人は来ないほうが良いと伝えているというものである。やはり占領下ベルギー人の対ドイツ感情は悪かったのである。

またシー・ニック・フォン・コッホの証言の中に書かれている課税については、「欧州戦争ノ際ニ於ケル交戦各国情関係雑纂（白、葡ノ部）」（外務省記録5・2・15・27-6）に関連する言及がある。陸戦法規慣例に関するハーグ条約49条に基づく命令を変更して、従来ベルギーに課した取立金日額5000万フランを、6月15日以後6000万フランに変更したと報告されている（「白耳義ニ於ケル独逸ノ取立金増課ノ件」1917年5月28日スイス三浦公使より）。

さらに上では引用しなかったが、証言の中でドイツはフラマン人に便宜を与えドイツに親近感を持たせ、いっぽうワロンについては排斥しているという記述がある。これは現在でもベルギーを2分するオランダ語圏（フラマン）とフランス語圏（ワロン）との対立を利用してドイツが施政しているという指摘である。これについても報告が外務省にされている（「フラマン問題ニ関スル最近ノ騷擾ニ付報告ノ件」1918年2月16日安達峰一郎公使より、「欧州戦争ノ際ニ於ケル各国ノ態度一件（白、伊、法王庁ノ部）」）。

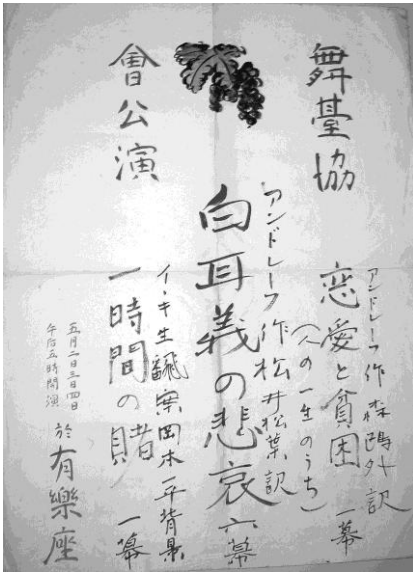
今般白国政府に達せる報道に依れば、過般独逸の使嗾に基きフランドルの白昼独立を宣言せるフラマン主義者の陰謀に対し、白国被占領地に於て熱心なる愛国的反動の勃発を見るに至り、本月一日被占領地に在る総

てのフラマン及ワロン選出議員は独逸宰相に対し強硬なる抗議を提出したるか、同三日アンヴェルスに於て行はれたる所謂フラマン主義者の独立祝賀運動は偶々白国人民の憤怒を買ひ、祝賀行列は憤激せる多数群集の為に遮られ其数六百を超えさりし〔中略……逮捕されたフラマン独立運動者をドイツ官憲が釈放させ、反対に逮捕を許した高等法院部長を逮捕したことに対して〕、人民反抗の氣勢各地に弥漫し、翌十日熾烈なる示威運動マリーヌ市に於て行はれ、独逸官憲の抑止其効無く翌十一日には武府市庁広場に於て各種団体代表者より成る六百余人の示威運動行はれ、独逸官憲の武力干渉は一場の騒擾を醸すに至れり〔中略〕追而風評に依れば独逸は尚進んで所謂フラマン主義者を使喚し、相当の形式を以てフランドルなる一独立国を建設せしめ之と単独講和を為すの計画を立て、其実行に着手せる趣なり

ドイツの勧誘によりフラマンで独立宣言がなされたことに対して、非難が巻き起こったというのである。津田由美子「戦間期ベルギーにおける言語問題の展開」（『国家学会雑誌』105巻5・6号、1992年）や『スイス・ベネルクス史』（森田安一編、山川出版社、1998年）によれば、そういうことは実際になされていた。

### 3. 演劇による義捐活動？

とりあえず掲げたポスターを見て欲しい。これは某古書店から購入したものである。約70cm×52cm大の用紙に手書き（文字と葡萄の絵は彩色）で描かれている。有楽座での舞台協会公演で、演目はアンドレーフ作／森鷗外訳の「恋愛と貧困（人の一生のうち）」、アンドレーフ作／松井松葉訳「白耳義の悲哀」、イ・キ生翻案／岡本一平背景「一生の賭」である。公演の月日は5月2日から4日の3日間であるが、年は不明である。この公演の中心が「白耳義の悲哀」にあることは、それが6幕で他は1幕ずつという構成で判明する。



さてアンドレーフ作／松井松葉訳「白耳義の悲哀」という演目は、『帝国文学』（23巻1号・2号、1917〈大正6〉年1・2月号）に矢野峰人が訳出している戯曲と同じではなかろうか。これはロシアの作家レオニード・アンドレーエフ（Леонид Андреев 1871～1919）の日本語への翻訳目録がネットで公開されていることにより想像できる（<http://book.geocities.jp/andof/index.htm>）。

訳者の松井松葉とは松居松翁とも言い、大正期を中心に活躍した劇作家であった。

公演を行っている舞台協会というのは、1913年に出来た演劇集団で、松井須磨子の問題をめぐって文芸協会が解散分裂したあと、芸術座・無名会とともに出来たものである。

以上のようなところからは、この公演が大正期、それも第一次世界大戦期、もしくはその直後くらいの時期に行われたものと推測することが可能となる。だいたい有楽座が演劇のメッカであったのは、関東大震災までのことである。

さて演劇史をひもといてみると、案外簡単に1918（大正7）年のことだとわかった。第一次舞台協会の最後の公演（第6回公演）の時のものである（大笹吉雄『日本現代演劇史 明治・大正編』186頁、白水社、1985年）。

さて問題は劇そのものであるが、これも演劇史関係の文献には配役が記されている（田中栄三編著『明治大正新劇史資料』130～131頁、演劇出版社、1964年）。

伯爵クレールモン（森英治郎）、有名な白耳義の作家エミール・グルリュエ（加藤精一）、其の妻ジャンヌ（加藤光子）、長男ピエール（森英治郎）、

次男モウリス（横川唯治）、伯爵の秘書官医師ラガアル（林幹）、伯爵の副官将軍（唐木光彦）、狂へる少女（前田筆子）、園丁フランソワ（林幹）、小間使シルヴキナ（白川照子）、召使アンリエッタ（清水花江）、白耳義を占領せる独逸公族司令官（加藤精一）、独逸軍中尉フォン・ブルーメンフェルド（林幹）、同フォン・リッツオ（唐木光彦）、同フォン・シュタイン（小柳京二）、同少尉フォン・シャウス（和田国雄）、陸軍技師クレッツ（市村貫一）、電信技師チーグレル（白崎菊三郎）、同グライツェル（伊奈精一）、運転手（小柳京二）、農夫（唐木光彦）、其他士官、歩哨、近隣の女数名

ここからやはりドイツ占領下のベルギーを題材としたものであることがわかる。『帝国文学』の翻訳でも六幕に分かれており、アンドレーエフの原作をすべて演じたものであるということが想像できる。本稿は文学研究でも、劇評でもないので、その作品の価値は無視して背景を中心に述べると、以下のような粗筋となる。

主人公は、ベルギーで名声を博している作家エミール・グルリュエという人物、片田舎の別荘で暮らしているところに、第一次世界大戦が始まった。別荘には老人の園丁フランソワが丹精をこめて作られた花壇がある。耳が遠くなったフランソワは、戦争が始まった喧噪を感じることができず、なかなか信じなかったのだが、それを悟ると花壇が荒らされることを嘆いて行方不明となる。ドイツ軍の侵攻に対して、モーリス（弟）とピエール（兄）という二人の息子が出征する。ピエールの出征に際して、その父であるエミールも従軍を決意する。図書館が、ドイツ軍に焼かれたという情報も、文学者の怒りを呼び起こし、その決心を高めた。この物語は、開戦直後の一カ月くらいの時間が対象であるが、まもなくピエールは戦死し、モーリスとエミールは傷を負い別荘に戻ってくる。そのもとをクレールモン伯爵が、ひとつの計画をもって訪ねてくる。ベルギーを占領するドイツ軍に対して、堰を壊して全土を水浸しにして国を守るという計画であった。その計画を実行するか否かを、[たぶん国民的英雄となった] エミールの判断を仰いで決行するという



のだった。この計画は実行されることになり、ドイツ軍は恐慌に陥る。

[ ]の部分はそうとは書いていないのだが、想像で補った部分である。さて計画が実行されて幕切れはどうなったかであるが、それがどうもまぐ理解できない。エミールの妻のジャンヌの言葉が、重要なようなのだが、とてもわかりにくい劇だ。水が来ることを知っていて安全なところに逃げようとしたエミール一行は、自動車の故障のために逃げられず犠牲になったように想像もできるのだが、明示されていない。だが最後のエミールの言葉は引用しておこう。

ピエールは死んだのだ、ジャンヌ。然し俺は神に誓ふぞ、ジャンヌ！白耳義は死なない。泣け、泣くがいい、お前は母親なのだもの。俺もお前と一緒に泣いて居るんだ——然し俺は神かけて誓ふ、白耳義は死なない。神様は私にそれを見る為の光明を授けられたのだ、だから俺にはよく見える。歌声がこゝに響き渡るだらう。ジャンヌ！新しい春がこゝを訪づれ、樹々は花を以て蔽はれるであらう——俺はお前に誓ふ、ジャンヌや、樹々は花に包まれてしまふのだ！母たるものはその小供をば慈しむであらう、さうして太陽は彼等の頭上に、彼等の子の金髪の小さな頭上に輝くであらう！

ジャンヌ！今後は殺戮も行はれなくなるであらう、ジャンヌや俺には新しい世界が見える。俺には我国民が見える——彼等は再び地上を訪れ給ふた神を迎へる為に棕櫚の葉をかざし乍らここに進つて行くのだ。泣け、ジャンヌ、お前は母なのだもの！泣け、不運なる母よ——神様もお前と共に泣いて居られる。然し乍らやがて再びこゝに幸福な母親が出来るであらう——俺には新しい世界が見える、ジャンヌや、新しい生活が見える！

作者アンドレーフが作品に籠めた寓意は別として、侵略に対して立ち上がるという意味での愛国心が描かれている側面があるということは言えるであろう。また国土が荒らされる、あるいは喪失されてまでも闘うことの意味を問うている側面もあるように思われる。しかしこの公演自体が、第一次世界

大戦中という時期の日本で演じられた背景には、ベルギーの悲惨な状況が報じられていたことによる話題性、また愛国心を扱ったものであるという物語の性格が影響していたのではなかろうか。調べ始めた時には「大戦中の義捐活動の一端となり、好評を博して終わった」と書きたかったのだが、そのような側面を持っていた証拠は見つからなかった。そもそも興行的には失敗で経済的に恵まれず、この公演を最後に舞台協会の名が消えることになったという（第2次舞台協会は別のもの）（秋庭太郎『日本新劇史』下巻 292 頁、理想社、1956 年）から、そんなことはさらさら考えてしなかったのかもしれない。これ以上詳しいことは後考を待つこととしたい。

〔追記〕本稿は平成 20 年度広池学事振興基金「特別研究助成」による研究プロジェクト「日本・ベルギー関係史の研究」による研究成果の一部である。